

# コロナ禍と若者支援

## ～いま、若者と家族に 何が起きているか～

### \* 第2部グループワーク(要約) \*

第2部では、6つのグループに分かれて、意見交換が行われました。コロナ禍における、それぞれの福祉現場のようすや取り組み方法などについて情報共有され、実践から見出された新たなニーズや今後の課題について議論されました。第1部で話題提供をしていただいたお二人の先生方にもセッションに加わっていただき、たいへん活発かつ熱心なグループワークとなりました。以下では、各グループのまとめとして発表された内容について、ご報告いたします。

#### ○グループ\_1

##### ◇高齢者の相談支援から若者支援につなげていく

高齢者の支援（訪問サービスや送迎など）を介し、日常のご家族に接する中で、家庭内の異変（お孫さんの困りごと・家庭内暴力等）に気づくことがある。しかし担当が異なるゆえに、どういう対応が適当なのかわからない、という問題提起があった。これに対して美濃屋講師から、「そういう場合は、ケアマネジャーを通じて地域包括支援センターにつないでいくとよい」という助言をいただいた。地域包括支援センターは主に高齢者福祉の窓口であるが、他の領域とも連携してくれるので（児童相談所など）、問題解決に向けてのステップとして活用すべき、というお話であった。

#### ○グループ\_2

##### ◇自分たちが助けられてきた場所を守っていくという子どもたちの意識変化

荒井講師の発言のなかで、子ども福祉センターに関わった子どもが、その後就職をして、会にカンパをしたり、活動資金を提供したりするというお話をうかがい、たいへん印象的であった。それはどうしてかということ、子どもたちが成長する中で、この団体というものがとても大切なものだという意識が彼らのなかに芽生えてきて、会を支えたいという気持ちが生まれてくるからだという。会の活動で声をかけられてきた子たちが、今度は自分たちが助けられてきた場所を守っていくという意識をもっていく、そういうことが多いそうである。「ボランティア」として、ポンっと入ってきた子たちは、活動を維持していこうという、そういう方向には向かないことが多いけれど、「助けられた」という気持ちを持っている子どもというのは、「ここを守ろう」というように意識が変わっていく。そしてそのことが本人の成長の過程ともリンクして、あとにつながっていくという。大変興味深いお話であった。

## ○グループ\_3

### ◇コロナ禍の拡大は経済的な貧困だけではなく、心の問題にも影響を及ぼしている

病院でソーシャルワーカーをされている方から、コロナ禍拡大の状況下において、自殺して病院に来られる方が多いというお話があった。生きづらさを感じておられる中で、入院をするのにも家族に頼れないし、そのことに負い目を感じていらっしやって、お一人お一人のさまざまな背景が複雑に存在していることをひしひしと感じているということだった。

今、なぜ生きづらさを感じるのかということを考えるとき、それは経済的な貧困だけではなく、心の問題もあるのではないかと考える。自分は墨田区で働いているが、昨今は環境もたいへん整ってきて、ハイクオリティな方も多い中で、それぞれに心の問題があったり、見えないところで問題を抱えていらっしやる方がいる。背景には複雑な問題が存在していると感じている。

## ○グループ\_4

### ◇「居場所」をどのように作っていくのか

コロナ禍が拡大していく中で、生活保護の訪問を控えるように言われたり、それまで学校が「居場所」であり安心して過ごせる場所であったのに、そういうものがなくなってきているという現実がある。印象的だったのは、学校の中にも「居場所」を作らなければならないといけないのではないかと、という意見である。

ほかにも、たとえば、普通級の学生さんには先生が個別に対応しているので、先生との一対一の関係が本人にとっての「居場所」ということで機能しているが、高校を中退したり、中学を卒業してそのまま行き先がないという人たちもいて、その人たちは10年20年と家にいらして、つながる場所がないまま、お父さんお母さんが亡くなられ、その後生活保護につながるというようなことがある。こうした方たちは、制度のことを知らなかったり、つながり方を知らなかったり、あるいは、社会的な支援に一度はつながってもその時は拒否したりということがあって、うまく制度につながらなかった人も多い。障害児であれば、特別支援学校になじめなくてそのまま退学してしまうと、その先の行き場は病院ということになってしまう。そういった方たちの「居場所」も必要なのではないかと、といった意見も出された。

若い方のつながり方というところでは、国際的な福祉の立場では、外国であればフェイスブックでつながりが出来たり、ゲームつながりでソーシャルワーカーになろうという人も出てきていて、若い人たちがつながりやすいメニューを入れていくのがいいのではないかと意見も出ていた。

### ◇「一人暮らし」「就職」という支援方法について

グループワークの中で議論になったのは、美濃屋先生のお話の中で、「ひとり暮らしをすることが機能不全の家庭を乗り越え、生きづらい地域から脱出する術になっている」という説明があり、どのようにしたら、そのことを前にすすめられるだろうかということであった。社会的なサポートとしては自立支援の資源を用いるなどの仕方があるが、支援者側の方では、「高校を出て18歳くらいで一人暮らし」という方法がなかなか機能しないこともあり、先生にうかがいたい。

#### →〔美濃屋先生の回答〕

一人暮らしのどこがいいかというと、虐待があるご家庭というのは、その虐待自体がおさまっても、家族葛藤などで、その後もエネルギーを奪われてしまうことが多いからである。

また、地域を離れた方がいいということについては、子どもはクラスカーストの中において、しんどい地域生活というのは、社会と学校の文化が密な田舎に多い。つまり、クラスカーストが地域社会のカーストになっていて、クラスカーストの中でいじめを経験していたりすると、その地域にいるということだけで、また非行にひきづりこまれてしまうということが起きるのである。それゆえに地域や家を出た方がいいということがある。

## →[美濃屋講師の回答(つづき)]

非行タイプの子どもは、「児童養護施設とか自立援助ホームのようなところはもうは絶対いや」と言うことがある。その際は、決して無理強いしない。そもそも施設にそんなに空きはないし、深刻な虐待ケースでない限り福祉の制度は使えないことが多い。その一方で、子どもが施設を求めてくる場合もある。

### ○「就労支援」というアプローチの可能性

他方で、非行傾向があって地域の中で苦しんでいる子、ひきずられてしまう子には、あえて学卒就職とか民間就職の仕組みを使いながら、借り上げ寮を提供してくれるところをお願いをしたりもしている。苦しんでいる子どもに、そういう理解を示してくれるところは多く、家庭で暮らしていたけれど、いろいろな事情のある子どもには、就労支援というアプローチでうまくはまるということがある。

また、スクールソーシャルワーカーという立場としてアドバイスするならば、サポート会社とのコネクションをいくつか持ちながら、仮に正社員雇用ではなくても、ちょっと違う地域であったり、寮が用意されていたり、生きづらい背景を理解してくれるネットワークをもっていることが重要になってくると思う。

## ○グループ\_5

### ◇「お互いに学び合う」という関係性について

グループワークでは、個々に感想を出し合う中でさまざまな意見交換がなされた。

ひとつは、福祉実践をおこなう中で、支援する側とされるという構図ができがちだが、そういう関係性ではなく、お互いに学び合うということ、支援される側の力を信じて力を引き出すという、そういう関わり方が大事であることに気付かされた、という意見が出された。相談機関に来てもらって、相談してもらうには、ハードルを下げるのが大事になるが、荒井先生の活動をみていると、声をかけてもらった若者が、次の日には今度は声をかける側に回っているという、そのピアな関係性が大切なんだと感じたということだった。

また、支援の必要な若者には、できるだけ早い時期に教育機関や学校でキャッチして、相談機関につなぐ必要があることなども話し合われた。時代が変わってきたと感じることとして、相談することにそれほど抵抗のない若者もいるのではないかという意見もあった。いずれにしても相談のしやすい環境・風土づくりが大切であるというまとめになった。

### ◇コロナ禍における高校生の就職への影響について

二つ目に、高校のスクールソーシャルワーカーをされている方からは、コロナ禍における若者の状況について話題提供をいただいた。例年とくらべると、高校生の就職率は下がったということであった。また、就職が決まり、さあ働くぞとなった時に4月の緊急事態宣言が出されてしまい、微熱が出て2週間ほど職場にいかれなくなり、その間うまく調整ができずに退職となってしまったケースもあったということである。また、親の失業があり、自分がしっかりしなくてはということ、プレッシャーを感じている卒業生も多いという情報もいただいた。

### ◇若者の介護領域での就労について

三つ目に、医療ソーシャルワーカーの方から、若者の就労の介護領域への拡大ということで情報共有いただいた。若者の中には介護領域で働くということに興味を持っている方が多いという。介護領域というのは、年齢の差があって、若者も居心地よく働いているということもある。就職につなげていくための方法としては、高校に積極的にインターシップを働きかけて、オンラインではなく実際に来てもらい見学をしてもらうことで、より興味を持ちやすくしてもらっている、ということであった。

## 〇グループ\_6

### ◇地域に出たときの「居場所」について

母子生活支援施設に勤務されている方から、母子生活支援施設は2年で退所しなければならないという現状であり、そうなったときに、地域に「居場所」がなくなってしまうという課題が報告された。地域に出たときの「居場所」というのは、NPOさんが実際に活動されているが、今後は行政や学校の紹介などを通して、つながりのない人たちもすくいと上げていく必要があるのではないか、という問題提起であった。

### ◇NPOによる「居場所」支援の役割について

NPOによる「居場所」支援に関して言うと、NPOは経営の面で非常に大変という事情がある。というのは、ボランティアの学生さんが来られても、なかなかフォローできないというのが現状であって、「費用がただ出ていく」という感じだからである。ただし、利害関係がないというところで、また塾とは違った学習支援ができていくという一面もあり、学生さんにとっても、結果が求められるので参加しやすいという声もある。そういう意味も含めて、地域の「居場所」の必要性を感じることがある。

### ◇「居場所」とはなにか

子どもたちの「居場所」についてさらに掘り下げるならば、母子支援施設に勤務の方のお話では、施設では進路相談を行っているということで、相談し合える人間関係というものの中に「居場所」を見つけていくという例が見いだされるという。

安齋先生の論文\*1のなかに、「居場所の二つの方向性」というものが出てくるが、ひとつは、「自己発揮としての居場所」、もう一つは「逃げ場としての居場所」であるという。わたしが勤務している特別支援学校では、「子どもたちが活躍できる場所を教員が作っていく」という授業づくりをしており、そういった意味では、子どもの活躍場所というのは用意されているように思う。しかし、「逃げ場」を作るというのはなかなか難しいのではないかと感じている。社会学者のオルデンバーグ\*2は、「社会の逃げ場所は自宅だ」という研究をしているが、すなわち、「逃げ場所」というのは、人それぞれにあるのではないかと考える。

学校の中に場所を作るということを難しいと感じるのは、特別支援学校は重度化を背景に人も増えており、そういう意味で難しさを感じている。他方で、「居場所」となる人を増やすということでは、やはり、多職種の方々为学校の中に入ってくるというシステムが必要なのではないかと感じているところである。



\*2 Ray Oldenburg  
『サードプレイス』(2013)

\*1 安齋智子(2003)「『居場所』概念の変遷」『発達』24(96), 33-37.  
<https://ci.nii.ac.jp/naid/40006007066>

## ◇美濃屋講師:「居場所」についてー逃げ場所としての「居場所」の大切さ

逃げ場所としての「居場所」ということでは、家も学校もつらい子にとっての「逃げ場になる場所」が必要だと思っている。中学校までは保健室登校や図書室登校があるが、高校生になるとそれが機能しなくなる。

それで、今学校には、多職種ということで、メンターだとか多文化サポートティチャーなどいろんな資源が入っている。しかし今後のことかというと、学校の中に必要なのは、地域の間人やNPOが入っていくことなのではないかと考えている。なぜかかというと、雇用関係にある人間が入るのであれば、結局、校長などの指揮系統の中に居るわけであって、理解やセンスにあふれる校長ならいいが、そうでないのであれば、いろいろな人材を入れてもそれぞれの才能が発揮しえないということが起きてくる。学校という制限の中から出られないのであれば、指揮系統が別の、例えば一般社団法人とか任意団体などと組むというのがひとつの方法ではないかと思う。

もう一つ考えているのは、学校の「居場所カフェ」づくりである。スティグマの少ない、学校に來れている子どものための「居場所」として学校が機能するという。そしてそこから、新しいアウトリーチのかたちとして学校内の「居場所」づくりを考えている。校内の「居場所」づくりについては、すでに神奈川と大阪で始まっているが、地域の方たちが「居場所カフェ」をはじめするための養成講座を準備中で、その養成セミナーのお手伝いをさせていただいている。興味のある方はぜひ声をかけてほしい。（\*興味のある方は美濃屋講師のフェイスブックをフォローしてください）

## ◇荒井講師:これからのソーシャルワークは「居場所」を作る力を支援すること

今の学校の「居場所」をヒントにして考えていくと、「自己発揮できる場所」や「逃げ場所」というのは、すなわち、生きるために必要な力をつけていくことであると思う。子ども福祉センターの活動は社会から評価していただいているが、僕はそう思っていない。そうではなくて、子どもたち自身が「居場所」となるような場所、つまり、「自己発揮する場所」であったり「居場所」となる所を見つける力・選んでいく力を養っていくことが重要なのではないかと感じている。

それを義務教育の段階でできるとベストだが、これが社会に出てしまうと施設や学校の内外で、そういった「居場所」を作っていくかなければならない。したがって、見つける力や選ぶ力だけではなくて、「居場所」を作っていく力というのが必要になっていく。これからのソーシャルワークはそこを支えていくことが重要なのではないかと感じている。

## ○質疑応答

質問:身近な友人や親族の「心の危機」に遭遇した際にはどうしたらいいのだろうか。本人は自分が深く悩んでいることに気付かず、かなり深刻な状態になって発見されることがある。周りの者らはどうすれば「心の危機」に気が付けるのだろうか。

### ◇荒井講師の回答

自分たちは、支援機関の枠組みで動いていないという自由度を生かして支援してる。ツイッターとかインスタでゆるくつながっているということがある。友達の変化というのは、日々の投稿やその発信内容から、その変化に気づくことがある。まったく投稿をしなくなったとか、反応がなくなったとか、死にたいとか、そういった時に声をかけるようにしている。「SOS」をいろんなところから観察できると支援につながることもあるので、日々のつながりが大事であると感じている。

### ◇美濃屋講師の回答

心の危機というのは実は起きていることだと思う。大変になってから分かるということもあるが、自殺企図と自傷とは意味が違っていると考えている。自傷というのは、その子なりに生きようとしているということであって、こうありたいけど…、社会はこうだけど…、自分はこうしたら…という、いろいろな葛藤のひとつの出方であったりする。なので、自傷があるからということだけで反応しないようにしている。その背景にあることを一つひとつほぐしていくこと、そのプロセスを大事にしている。ほんとうの企図ケースは急性期的な対応が必要なものであって、自傷というかたちで出ることによって、そこからまた誰かとつながるチャンスになることがある。

## ○全体まとめ\_金 圓景(社会学部付属研究所所員)

### ◇いかにして生の声を拾っていくのかということ

美濃屋先生からは、学校現場で起きているリアルな現状をご報告いただくとともに、スクールソーシャルワーカーとして、学校現場でチームアプローチをしていくことの大切さについて学ぶことができた。荒井先生からは、インフォーマルな支援につながるまでの期間、すなわち「居場所としての学校」の機能がストップした時のこの空白な時期において、子どもや若者がどのように過ごしていたのかを、先生の取り組みを通して知ることができた。また、その前からつながっていた若者たちが自立に向けて活動しているということ、その継続的につながりをもつことの大切さに気付かされた。

わたしたちは、そもそも支援を必要とする子どもたちが、どのような必要を支援としているのかについて考える際、こちらで課題やニーズを決めてしまいがちである。終結についても同じで、これぐらいの支援で大丈夫だ、などと判断してしまうことがある。だからこそ、当事者となる子ども・若者がほんとうに必要としていることは何かということはどう把握するのか、いかにして生の声を拾っていくのかということの重さを感じた。今日の講座は、これからのウィズコロナ、アフターコロナ時代に、ソーシャルワーカーとして、あるいはそれぞれの立場で、どのような支援が求められるのかを考えさせられる時間となったのではないかな。

## ○閉会挨拶\_深谷 美枝(社会学部付属研究所主任)

### ◇「お互いに学び合う」という関係性について

講師の先生方のお話、そのあとのグループワークを経て、残ったキーワードは「居場所」だった。以前に、障害を持った人たちの地域活動に取り組んだ時期があり、障害者が地域に出てくると、地域内孤立をしてしまっ「居場所」がないということがあった。そのとき、「いったい、居場所というものはどのようにして作っていったらいいのだろう」と考えた。

そして、ここでまた、「居場所」というキーワードが出てきたな、と思った。

美濃屋先生もおっしゃっていたが、学校カフェづくりのような取り組みが必要であると感じている。社会の中で、家族や学校や職場以外に生きていく場所をそれぞれがみつけていくと、生きやすい社会になると思う。

もうひとつ思うのは、家族のもつ力のことである。療育センターの障害児支援では、コロナ禍の状況下において、子どもや家族にたいへんなことが起きてくるだろうと考えられていたが、それは意外にも少なく、お父さんが障害児の療育に入ってきて、家族の関係がとてよくなったという話も聞いている。困難な状況下において、家族の力・家族の機能が発揮されるということがあるのかな、ということも感じている

荒井先生からは、こちら側で「居場所」を作るというよりも子どもたち自身が作っていく、あるいは、子どもが自分で見出していく・育んでいくという視点をいただいた。参加者のそれぞれの現場にもつながることであり、さまざまに状況を重ね合わせながら考えたことがあったと思う。「居場所」とはなにか、「居場所」とはどのように作り・育んでいくのかということについて、また個々に考えを深めていってほしい。

今日は全国から大勢のご参加をいただき、ほんとうにありがとうございました。今日の市民講座が、明日からの実践の何らかのヒントとなることがあれば幸いです。

みなさま、お疲れさまでした。